

草木成仏口決

文永九年二月二〇日 五一歳

問うて云はく、草木成仏とは有情非情の中何れぞや。答へて云はく、草木成仏とは非情の成仏なり。問うて云はく、情・非情共に今經に於て成仏するや。答へて云はく、爾なり。問うて云はく、証文如何。答へて云はく、妙法蓮華經是なり。妙法とは有情の成仏なり、蓮華とは非情の成仏なり。有情は生の成仏、非情は死の成仏、生死の成仏と云ふが有情・非情の成仏の事なり。其の故は、我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは、死の成仏にして草木成仏なり。止觀の一に云はく「一色一香中道に非ざること無し」と。妙樂云はく「然も亦共に色香中道を許す。無情仏性惑耳驚心す」と。此の一色とは、五色の中には何れの色ぞや、青・黄・赤・白・黒の五色を一色と釈せり。一とは法性なり、爰を以て妙樂は色香中道と釈せり。天台大師も無非中道といへり。一色一香の一は、二三相對の一には非ざるなり。中道法性をさして一と云ふなり。所詮十界・三千・依正等をそなへずと云ふ事なし。此の色香は草木成仏なり。是即ち蓮華の成仏なり。色香と蓮華とは、言はかはれども草木成仏の事なり。口決に云はく「草にも木にも成る仏なり」云云。此の意は、草木にも成り給へる寿量品の釈尊なり。經に云はく「如来秘密神通之力」云云。法界は釈迦如来の御身に非ずと云ふ事なし。理の顯本は死を表はす、妙法と顯はる。事の顯本は生を表はす、蓮華と顯はる。理の顯本は死にて有情をつかさどる。事の顯本は生にして非情をつかさどる。我等衆生のために依怙・依託なるは非情の蓮華がなりたるなり。我等衆生の言語・音声、生の位には、妙法が有情となりぬるなり。我等一身の上には有情非情具足せり。爪と髪とは非情なり、きるにもいたまらず、其の外は有情なれば切るにもいたみ、くるしむなり。一身所具の有情非情なり。此の有情非情、十如是の因果の二法を具足せり。衆生世間・五陰世間・国土世間、此の三世間有情非情なり。一念三千の法門をふりすぎたてたるは大曼荼羅なり。当世の習ひそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり。天台・妙樂・伝教、内にはかがみさせ給へどもひろめ給はず。一色一香とのしり惑耳驚心とさゝやき給ひて、妙法蓮華と云ふべきを円頓止觀とかへさせ給ひき。されば草木成仏は死人の成仏なり。此等の法門は知る人すくなきなり。所詮妙法蓮華をしらざる故に迷ふところの法門なり。敢へて忘失する事なかれ。恐々謹言。

二月廿日

日 蓮 花 押

最蓮房御返事